

学部報告

イベント「宗教とポピュラー文化」報告

Religion and Popular Culture

- 深谷公宣／富山大学芸術文化学部、佐藤真基子／富山大学教養教育院
FUKAYA Kiminori / Faculty of Art and Design, University of Toyama, SATO Makiko / Institute of Liberal Arts and Sciences, University of Toyama.
- Key Words: 映像文化, 古代グノーシス主義, ジャン・ボードリヤール, ジュディス・バトラー, 『ゴーストバスターズ』, 『マトリックス』, *Thunder Perfect Mind*

概要

日時：平成28年7月8日（金）13:00～16:15

場所：富山大学高岡キャンパス 講堂／B-211 講義室

講師：ジョナサン・カハナ博士（デンマーク、オーフス大学研究員）、佐藤真基子教授（富山大学教養教育院）、深谷公宣准教授（富山大学芸術文化学部）

参加者：「映像文化論」「卒業研究・制作（深谷担当）」履修学生、本学教職員。

学部授業「映像文化論」（2年前期）及び「卒業研究・制作（深谷担当）」（4年）において、映像作品に見られる宗教モチーフの意味について考えるイベント「宗教とポピュラー文化」を開催した。発案者は本学教養教育院教授、佐藤真基子である。佐藤のコーディネートにより、比較宗教学を専門とするデンマーク王国オーフス大学研究員ジョナサン・カハナ氏をゲスト講師として招聘した。

イベントはシンポジウム、セミナーの2部構成とした。シンポジウム（第1部）では「映像文化論」の履修学生（107名登録）、オープン・クラスの参加者（1名）、及び学内外からの来場者を対象に、3つの映像作品（『ゴーストバスターズ』、『マトリックス』、*Thunder Perfect Mind*）を事例に挙げ、宗教のモチーフに着目しながら議論を展開した。セミナー（第2部）では「卒業研究・制作」の履修者（大谷知穂学生、大廣優里学生、岡川春樹学生）に学内からの参加者（小田夕香理芸術文化学部講師、小坂真里江学生）を加え、カハナ氏による講義と質疑応答をおこなった。

企画の経緯

平成28年2月にカハナ氏から、国際学会参加のため韓国ソウル市を訪れる折に日本においても学術的交流の機会を作る可能性について、佐藤が問い合わせを受けた。研究者を対象とする、専門的学術交流の機会のみを設けることもあり得たが、これまでカハナ氏が取り組んできた研究の中でも、現代の表象文化の中にあられる西洋

古代由来の宗教思想についての分析は、学生にとっても、知的好奇心を刺激する、教育的効果の高い内容を含んでいると考えた。そしてその内容は「映像文化論」の授業内容と密接に関係するものであることから、この授業のゲスト講師としてカハナ氏を招聘する企画を立てた。こうした内容に関する学生の関心や理解力を把握している同科目担当者の深谷を中心に、授業としてより効果的な形式や議論展開、時間配分について講師3人の間で繰り返し話し合い、準備した。現代に生きるわたしたちが日ごろ何気なく享受しているポピュラー文化の背景にある歴史や思想を学ぶことを通して、参加者が、人間の創造的営みをより複眼的にとらえ考えるきっかけを得ることを企図した。

シンポジウム

「映像文化論」は、映像に表現される文化的要素解説の視点や方法を学ぶ授業である。半期15週の前半でハリウッドやヌーヴェル・ヴァーグのような映画制作の潮流・表現形式の特徴を概観し、後半では映画に描かれる人種、民族等、トピックを絞ってケース・スタディをおこなう。今回のシンポジウムは、ケース・スタディ実践の場として位置づけることとした。

ケース・スタディではトピックを具体化する事例が重要となるが、幸い、準備の早い段階でカハナ氏から、映画『ゴーストバスターズ』（*Ghostbusters*, 1984）、『マトリックス』（*Matrix*, 1999）、プラダのコマーシャル・フィルム *Thunder Perfect Mind*（2005）を題材にしたことの提案があったため、氏の提案を軸に議論する内容の細部を整えた。当日扱う論点には、古代グノーシス主義、米国における環境保護局、仏思想家ジャン・ボードリヤールの理論が含まれており、未知の学生がいると思われたため、前週の授業でこれらの簡単な紹介をおこなった。また、イスラエル出身のカハナ氏の使用言語が英語であり、当日の議論が英語中心となるため、内容を文字情報で補足する15ページの資料を作成し、配布した。

シンポジウムは、3人で事前に準備した論点に関する質問を、司会の深谷がカハナ氏に投げかけ、回答を得たのちに佐藤が適宜補足する、という形式で進行した。映像クリップを観ながら議論したやりとりの概要を以下にまとめる。

(1) 『ゴーストバスターズ』

信仰宗派と環境問題に対する意見の相関を示した資料を参照しながら、ゴースト襲撃を受けたニューヨーク市の市長のもとへ「バスターズ」の面々、環境保護局の役人、カトリックの大司教が訪れる場面を鑑賞した。行政、教会、環境保護局と「バスターズ」との関係性についてカハナ氏に問うたところ、「政教分離」の原則のため、行政と教会が表向きな協力関係を表明しにくいことが描写されている点への指摘があった。また、市長が公的機関である環境保護局の反対を抑え、大学という公的機関を出て私的な団体として活動している「バスターズ」にゴースト退治を託す様子に、本作公開当時の政治的潮流で「小さな政府」を志向する新自由主義の思想が反映しているとの解説があった。

(2) 『マトリックス』

主人公のハッカー、ネオがテロリスト、モーフィアスの導きにより「マトリックス」が支配し隠蔽する現実世界を垣間見る場面を鑑賞した。作品が強調するイメージの優位性と、ポストモダニズム的な思想、特にイメージが現実に先行するというジャン・ボードリヤールの思想との関連性を確認したのち、カハナ氏に対し、「マトリックス」の遍在性とキリスト教的な「神」との類比性について問うた。カハナ氏からは、キリスト教の神は最高善であり人間の関わる余地がないが、マトリックスには人間も関わる。その意味で、マトリックスは「悪」の要素を認める古代グノーシス主義の「神」に近いのではないかとの回答を得た。

(3) *Thunder Perfect Mind*

イタリアのファッション・ブランド、プラダのCM作品である。登場する女性の映像に合わせ古代グノー

シス主義文書の「雷・全きヌース（“Thunder: Perfect Mind”）」の一節が、ナレーションとして引用される。全編鑑賞後、このねらいと効果についてカハナ氏に問うた。「私は妻にして処女」など、一見矛盾した詩句は、片方だけを女性の理想像とするのではなく、両方の側面を包含するものであり、その複合性が新しい女性の可能性を開くことを表現しているのではないかとの回答があった。

本授業に対し履修学生からは「異文化における宗教への関心が増した」「I realized many movie include each spirit. (略) 英語がむずかしかったが、とてもおもしろい授業でした (原文ママ)」など、授業への関心の高さを示す感想が寄せられた。また、授業終了後、中庭で休憩するカハナ氏に対し個人的に話しかけに行く学生の姿も見られ、本授業が異文化交流の契機としての役目を微力ながら果しえたことを確認できた。

セミナー

シンポジウムに引き続いて行われたセミナーでは、“The Desert of the Real itself? Language, Materiality, and Bodies in Gnosticism, Critical Theory and The Matrix” というタイトルのもと、シンポジウムでもその映像とともに紹介された映画『マトリックス』で表現された世界観、その背景にある思想についてのレクチャーと、参加者との質疑応答が行われた。映画『マトリックス』で使われているボードリヤールの思想によれば、芸術を含むわたしたちの表象活動は、先行する「実在」の存在に基づいてなされるのではなくて、むしろ「実在」に先行し、「実在」は存在しないということを隠している。カハナ氏は、このボードリヤールの示す世界観が、ジュディス・バトラーによる身体論ないしジェンダー論、そして古代グノーシス主義の神話とも一致するものであることを指摘することによって、わたしたちにとって「実在」とは何なのか、わたしたちはいかにして「実在」ないし真実と関わりうるのかについて考える端緒を提示した。質疑応答においては、参加者からレクチャーの内容をさらに深める議論が展開され、実り多い時間となった。小田講師から、ジュディス・バトラーが直接グノーシス主義に言及している箇所があるのか確認の質問がなされると、カハナ氏は、直接の言及はないもののその思想に類比性が見いだせる旨回答した。また、小坂学生から『マトリックス』が制作された当時のグノーシス主義の流行の度合いについて質問が出されたのに対し、カハナ氏は、1990年代、ポストモダニズムの影響やフランクフルト学派の再評価と平行してグノーシス主義への関心が高まっていたことを説明しつつ、『マトリックス』はボードリヤールから影響を受けているものの、ボードリヤール



図1 シンポジウムの議論を聴く学生 (撮影：岡川春樹)

ル自身はその世界観と自説との関連を否定している点を補足した。

まとめ

今回のイベントを通し、参加学生は、ふだん目にする映像が、宗教の要素を意識して観なおすと違った様相を帯びてくることを学んだ。このことだけでも、映像を複眼的にとらえ、考える力の向上につながったはずである。また、国外の名高い研究機関の研究者の話を英語で直接聴講するという経験は、学生の認識を、学術専門領域や異文化領域のより深い部分へと導く好機になったのではないかと考える。